

養老の泉・地名「大字鯨井、小字有泉」発祥の伝説

昔、まだ現在の小字「有泉」と云う地名が定まる前の事です。其の頃は、的場、上戸方面の台地に降った雨水による地下水は、今の霞ヶ関駅北方から、日枝神社、東方百米位を結ぶ線にそって流れ、そのまま現在の有泉、後方の地盤に集まり、小畦川にそうした水田地帯に遮られ、各所に出水「泉」となって湧き上がり堀の中に流れ込んでいました。昭和初期迄、道路、河川の土木事業があまり進展しなかったために大差なく此の状態は続いていて、大雨の降る毎に、的場、上戸方面の雨水による野水は、地下水としてのみきれなくなつて表面に出て、一時的な川となり、有泉地内の道路の上は、鮎や、泥鰌がさかんに上に泳ぐ姿が見られた昭和初期迄、有泉、後地区には、この泉を利用した「川棚」と称する、泉の廻りを囲い洗い棚をつくり、食器野菜等の洗い場に利用していました。伝説がささやかれた頃は、恐らく此の世で一番上等の飲料水として使用していたのではないかと思います。

昔、此の里に働き者の一家が住んでました。父親は、思慮分別も厚く、村の人からも信用もあり、何を作らせても、人々の手本になるような人でした。また、其の倅も、親に負けない働き者で、春から夏になると他の若者達が、朝作り仕事の草刈りに出かける頃にはもう、一荷の草を刈り終えて帰るほどでした。ところが、今年の春から、これから草刈りに行く隣の若者と、もう帰ってくる、働き者の若者の間に変わった事が起き始めたのです。二人がすれ違うとき、特別にいい匂いの酒の香りが、朝帰りの若者から発するのを、隣の若者が気づき始めました。それが、一朝だけでなく毎日続くので、変に思った若者は次の朝早く起きて働き者の後をつけました。すると草を刈り終えた働き者の若者は、いくつもある泉の一つ廻りに木が生え、よし、マコモで人目につかない泉のほとりに腰を下ろし、竹筒に入った水を飲みはじめました。ところがそとつけて来た、若者の鼻につく匂は、いつも二人ですれ違うときのあの香りでした。

其の頃は「ニゴリ酒」といってもどこの家でも大なり、小なり、各戸で作り飲んでいたのですが、後をつけて来た若者の家の酒とは、まるっきり違う匂いがしたのです。若者は意を決して、酒を飲む、若者のそばに近づき、おどろく若者にいいました。「おめい、何、飲んでるだ。おらんちのノゴリと違うようだが」働き者の若者は、一寸ひるんで、だまったまま、相手の顔を見ていましたが、あまりさわがれると困ると思い「ん、実あ、此のニゴリ、ヲトウが、ここんとこの出水で作ったニゴリなんだ。他のたあ、丸つきし、味が違うんで、オトウは夜中おらあ、人の起きねいうちに少しずつ飲んでいたんだ。」「何だ、そんじゃ、一人きしで、うまくやろうとしたんか」「いやー、そうじゃねい、あんまりうめいんで、人に知れると、さあぎが大きくなるとこまるって、オトウがゆうのよ」そうか若者は、少し考えると、働き者の若者にいいました。「どうだ、決して、他の者にやい

わねい、家の者にも話さねえ、俺にだけ、此の出水で作る、ニゴリを教えろ」と、一寸こわい顔になってつめよりました。働き者の若者は、小さい時からの仲の良いトナリの友達の申し出だったので、まあ一人位は大丈夫と思い、「そうか、間違ねえな。人さに、しゃべるでねえぞ」といって、作り方をよく教え、「だけどよ、飲むときあ、早起きして、人の居ねいうちに草刈ってしまい、ここにかくれて飲めや一なあ約束してくんろ」「いいとも」二人は、かたく誓い合って別れました。ところが、それから三ヶ月ほどたった、夏の終わる頃になると、村に異変が起こりました。

部落の七、八人いる若い衆が一せいに早起きになり、働き者になったのです。朝、親達が起きて見ると若い衆は、とっくに草を刈って帰って行って、オッカアの作った朝メシを急いでかつこむと畑にでて一生懸命に働くようになったのです。ただ少し違う事は、メシと一緒にくるとき、大分うすらいてはいましたがよい酒の香りが若者達にただよっていたのですが、部落の全部の親達は、若者が働き者になったのですから喜んでいました。そのうちに秋になり、草ものびず、朝も大分涼しくなって来ましたが、若者達の早起きは、一日も休む事なくつづいていました。ようやく大人達も変に思い、此の事を話すようになりました。「どうもおかしい。おまえさんどこでも、相かわらずか」「ん、それよ。おらんちの、ナマケ野郎、あんなに変わるたあおかしい。こりゃなんか、やつらやってるぜ、うっかりしてたな」「どうだ、思いきって、あしたんあさ一つけて見るべえか」「よーし、よかんべい」と云う事になり、二人の親父は、次の朝、俵の後をつけて見て驚いた。部落の若者の全部は、例の泉の辺で車座になり、ニゴリ酒を飲んでいるではないか。ところが何十年も自分の作ったニゴリ酒を飲みつづけた二人のヲヤジの鼻につく匂いは、今迄の酒とは全く違うよい匂いに気がついた。親父二人は顔を見合わせ、こりゃ一へたにさわぐと、こっちの、方が損になりそうな気がして来て、うなずき合うと、静かに近づいて、「おめい達、みなして何の相談だ、それにしてもこんなに早く、よっく働くようになったで一。感心はしていたんだが」「だけどよ、ぱっかにいい匂いがするじゃあねいか、一パイのませろや」村一番働き者の若者は、観念して、今迄の一部始終を話し、「もとは一おらんちのオトウが発見したんだけど一おらたち、悪いつもりやねいんだ。さあぎゃー、でかくしねいようになー」トナリンちから、又、トナリに伝わり、部落全部の若い衆に知れてしまい、ただその頃の若い衆は義理がかたく、自分達の楽しみとして、秋になり、さて、冬んになったら、どうしたろうねー。大人達は、ひそかに集会を開き、働き者の親父を中心に、此の部落だけで此の泉をつかい、にごり酒を作りました。ところが、こんなうまい酒の話が、他に知れぬはずもなく、それこそ酒に酔った勢いで次から次に伝わって行きました。遂に、京伏見迄伝わってしまい酒の本場から大勢の人がやってくるようになり、むしろ、関東より、上方、関西の方に、此の出水(泉)の水の事が知れわたり、関東の養老の泉として評判になりました。とうとう部落の人達は、又、集会を開き、自分達でこっそり楽しむ事をあきらめました。「どうも俵共の云う通りにしときゃよかったに、手後れれだな」

「どうだ、どこんちにも泉があるんだ、泉のある里、有泉がいい」
「そうだ、そうだよかんべい、地名にしようじゃないか」そして此の里は、有泉が、正しい地名となりました。

以上鯨井史より抜粋 昭和58年3月31日 発行